

新聞経営の先達者：ウォルター家と『ザ・タイムズ』(下)

鈴木 雄 雅

1. ジョン・ウォルター1世
2. ジョン・ウォルター2世
結び
(以上 40号掲載)
3. ジョン・ウォルター3世
4. ウォルター一族の手を離れたタイムズ
結び
(以上 今号掲載。図表番号も(上)を継続している)

3. ジョン・ウォルター3世 (John Walter III)

1818-1894 (在職期間 1847-1894)



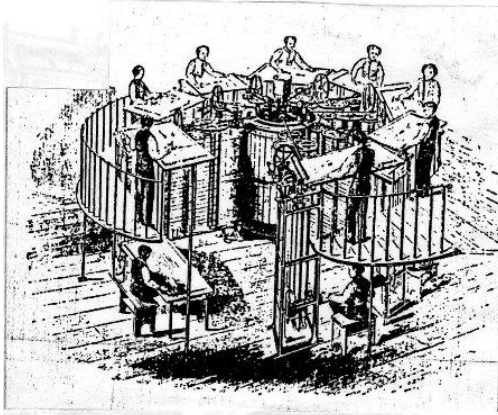
ジョン・ウォルター2世の死後、1847年から経営者の座についたのは、彼の息子ジョン・ウォルター3世である。ウォルター3世もまた、父ウォルター2世同様 (J.ストットワード、T.バーンズ)、ジョン・ディレンという名主筆を得て、タイムズがイギリス新聞市場を独占するほどに成長させた。経営者としてのウォルター3世は、タイムズの発行部数が増加するのに伴い、技術革新にも一層力を注いだ点が特筆される。

輪転機の出現

この時代タイムズはシリンダ印刷機を使っての印刷工程の機械化に本格的に乗り出すが、とりもなおさず、それは新聞生産のための印刷機械の開発に一層拍車をかけることになる。当時、印刷技術開発の究極的な目標は、巻取紙への輪転印刷であった。

輪転印刷の最初の実用化に成功したのも、タイムズ社ではあったが、一足とびに成功したわけではない。

図2 八人差し立て型活版印刷機



平ら台の印刷機から凸版輪転機へ進化する過渡期には、活版回転印刷機 (Type-revolving machine) が登場している。これは、1848年、A.アプルスが開発した八人差し立て型活版回転機¹と呼ばれるものである。初めてのころは、1時間に8,000枚、のちに1万枚の印刷を可能にした。しかし、設計自体

に無理があり、騒音もひどく16人もの人間の仕事としては、かなり非能率的なものであった。

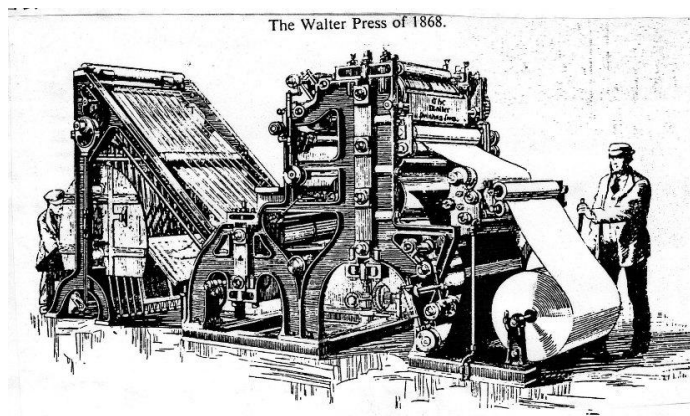
同じ頃、アメリカでは、リチャード・マーチ・ホー (Richard March Hoe 1812-86) が、輪転印刷機の開発に成功していた。水平型のホー型活版回転機の発明である。これが、世界最初の輪転印刷機であった。この機械も1時間当たりの印刷可能枚数は8,000枚であった。しかし、アプルス印刷機よりも能率がよく、同機種を見学し、ホーの印刷機の方が優れていることを認めたウォルター3世は、さっそく1858年に設置している。この機械を設備した頃には、2万2,000から2万4,000枚の印刷が可能となるほど、改良が進んでいた。

さらに、1868年には巻取紙用凸版輪転機を完成させ、1時間につき1万2,000枚の両面刷りが可能になった。これは、ウォルター3世の名前から「ウォルタープレス」と呼ばれ、のちに、「最初の完全なロータリー

¹ 1本の垂直な多角形の版胴の回りに、8個の圧胴を立て、8人の紙差し工が機械の回りの回廊に円陣をくみ、紙差し工の足場の下に8人の紙取り工がしゃがむ。そして、普通の活字で組んだ活版が、段ごとに取り付けられており、紙はテープで運ばれている間に垂直になり、刷りあがると、紙取り工が手で取り出すという方式のものであった。庄司浅水 『印刷文化史』(1975)、p.298

マシーンの創造」であったと言われている。こうして、短時間タイムズ社は大量部数の印刷が可能になった。

図 3 巻取紙用凸版輪転機



Oliver Woods & James Bishop. *The Story of the Times*, 1985. p.96.

ジョン・ディレーン主筆

ウォルター3世が自らの片腕として選んだのは、ジョン・ディレーン (John Thadeus Delane, 1817-79) という若きジャーナリストであった。この時ディレーンは23歳。オックスフォード大学卒業後、タイムズに入社してわずか1年であった。彼もまた、T.バーンズ同様、何者も恐れず、断固として批判の精神を忘れず、批判の力を緩めなかった。



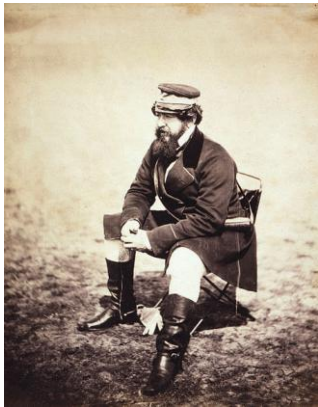
バーンズとの決定的な違いは、自分自身で意欲的に筆を取らなかったということである。彼は自分で記事を書くというよりは、様々な人と親交を保ち、機密情報をとるタイプであった。そのために、ディレーンの配下にあつて、タイムズの地位は高まり、仕事熱心な記者にかかつては、いかなる国家も安泰ではなかった、と言われている。

たとえば、1856年にイギリス政府は、タイムズの報道によって初めて、クリミア戦争の申し入れをロシアが受諾したことを知ったほどであった。このために、イギ

リスの政治家ディズレーリ (Benjamin Disraeli 1804-81) は、「世界中の都市には、英国大使が2人駐在している— 1人は女王が派遣した大使、もう1人はタイムズが送った大使である」と述べたという逸話も残っている²。

ディレーン自身は筆をあまり取らなかったが、彼の思想は新聞全体に広がっていた。というのは、コラムにはすべて目を通し、彼の承認を得たもののみが、紙面に現れていたからである。タイムズの紙面で、ディレーンが示したのは、新聞は政府から独立した存在であり、世論に対する責任は負っているが、統治には責任がないという考えであった。最も影響力の強いタイムズが、こうした姿勢を明らかに示すことによって、イギリスジャーナリズム界にこの考えを浸透させていったのである。

さらに、世界初の従軍記者ウィリアム・ハワード・ラッセル (William Howard Russell 1820?-1907) をクリミア戦争 (The Crimean War 1854-56) に派遣し、タイムズはますます他紙を圧倒した。この戦争以



前は、現地で通信員を雇ったものの、長続きせず、需要に応えるため、自社の記者を戦地へ送ったのである。この試みは見事成功した。ディレーンはラッセルを戦争報道のみに専念するように示し、結果的にラッセルが送る数々の批判的な報道によって、1855年には、アバディーン内閣 (George Hamilton Gordon Aberdeen 1852-55) はその政治失態から総辞職を余儀なくされている。またクリミア戦争時には、発行部数が5万部から7万部へと増加した。

こうして、ウォルター3世と名主筆ディレーンのコンビは、アメリカのリンカーン大統領 (Abraham Lincoln 1809-65) によって、「タイムズは世界中において、最も強力な存在である…」³と言われるほどの地位を築き上げたのである。ディレーンは1877年までの約四半世紀、タイムズの主筆として権勢を誇った。

² ジョン・C・メリル、山室まりや訳『世界の一流新聞』(早川書房、1970)、p.247。

³ 磯部佑一郎『イギリス新聞史』(ジャパントイムズ社、1984)、p.88。

外国通信網

従軍記者や特派員を派遣し、外国通信網をさらに充実させたタイムズであったが、技術面でも著しい進歩がみられた。それは社会コミュニケーションの発展と巧みに歩調をあわせたからである。

1848年に、イギリス国内各地に電信が利用できるようになった。続いて51年には、英仏海峡の海底電信が敷設された。このような電信機の実用化は、ニュースの伝播、報道のスピードアップに拍車をかけることとなった。電信機以前のニュースの速報手段は、専ら伝書鳩であったが、電信機の出現によって、より正確で速い報道を可能にしたのである。

さっそく前述のクリミア戦争の報道では、外信部長が、ラッセルに電信機を使うように勧めている⁴。しかし、執筆の仕方を変えなければいけないこの方法の難解さは（簡単明瞭に戦場の様子が伝わっていくような事実を詰めた文体）は、伝統があるゆえに、タイムズは電信機利用の成功の遅れをとってしまったというのも皮肉な事実である。

この時代、イギリスの新聞界の大衆化に大きく貢献したと言われる国際的な通信社、ロイター（Reuters）が誕生する。ロイターは、ユダヤ人のポール・ユリウス・ロイター（Paul Julius Reuter 1816-99）によって、1851年創設された。その時、ロイターが一番欲しかったのは、イギリス国内でもっとも影響力のあるタイムズとの契約であった。ところが、早くからタイムズに働きかけたものの、タイムズの方は独自の海外取材網を持っているから、海外ニュースの要約などはいらないとして、とりあおうとしなかった。その結果、タイムズとロイターのスクープ合戦が始まるのである。そしてこの合戦で、決定的な敗北を認めざるを得なかったのは、予想に反してタイムズの方であった。

1859年、ロイターがナポレオン3世の皇帝演説⁵を初の国際ニュース

⁴ *The History of the Times*. vol.II,1985. p.434.

⁵ ナポレオン3世皇帝演説のスクープ 1859年、ナポレオン3世が行った議会演説の内容をスクープした。演説は、かなり挑発的な内容が盛られ、フランスの間接的な宣戦布告の意思表示になる可能性があるものと予想された。そこで、フランス政府に演説の全文を前渡ししてくれるように申し入れ、スクープしたのである。これは、大英帝国だけでなく、世界を揺るがしたの

の電信によるスクープに成功し、これを契機にタイムズはロイターの速報能力を認めざるを得なくなり、ロイターの通信を積極的に採用するようになっていった。皮肉にも、このロイター通信の採用が功を奏し、タイムズは海外通信も充実した新聞として、飛躍を遂げる要因のひとつにもなったのである。

大衆紙の出現とイギリス新聞界の変容

1830年代から50年代までタイムズの発行部数は、常時4万部前後であった。ほかの日刊紙は5、6,000部であったことを考えると、日刊紙におけるタイムズの優位ははっきりしている。しかし、同時代の日曜紙ニューズ・オブ・ザ・ワールド (*News of The World: 1843-2011*)⁶、ロイズニューズ (*Lloyd's News: 1842*)⁷などはどれも10万部を超えているという状態であった。日曜日は安息する日として、宗教関係者は妨害したものの、読者の力には勝てず、登場した日曜紙はまたたく間に日刊紙を超える部数を誇るほどに成長を遂げたのである。

主として、日曜紙の発行部数が伸びたのは、労働者階級が新聞を購読する習慣ができたことによるものであったが、日曜紙は単に日刊紙からのニュースの集積を内容としたものである。しかし労働者が購入したのは、日刊紙ではなくむしろ日曜紙の方であった。これは、読者の購買力の差を示している。つまり、タイムズのような日刊紙は、裕福な人々のために、社会の情報を知らせる道具であった。そのタイムズ自身も「ジェントルマンによるジェントルマンの新聞」をめざし、当時では珍しく大学卒業者のみを記者として採用していたのである。

この購買力の差を生み出していたひとつの要因に、新聞の価格があった。1861年まで、イギリスでは新聞に関して3種類の税が課せられて

も同然のスクープであった。

⁶ 2011年盗聴事件の不祥事により、所有主であったR.マードックの決断で廃刊。約160年近く発行部数を誇る日曜紙。各方面にわたるニュースと読み物は、豊富な写真と共に、興味本位で編集されている。

⁷ 1681年に、ロイズ(上、1参照)に集まる客のために船舶情報を掲載したのを発行したのがはじまり。新聞は表裏2面からなり、週3回発行されていた。

いたことはよく知られている。スタンプ税、広告税、紙税の印刷税である（表 3 参照）。このため、日刊紙の価格は普通 6 ペンスか 7 ペンス。日曜新聞でも 3~6 ペンスであり、それ以下に下げるとは経営上困難であった。それでも日曜紙は週に一度の支出であるから、出費としては 6 分の 1 程度ですむ。当時の労働者の給与が週平均 10 シリング程度であったことを考えると、いかに新聞が高価であったかわかるだろう。

しかし、この印刷税はタイムズにとっては、極めて有利に作用した。というのは、印刷税を払えば、郵便料が無料となったので、ページ数が多く、しかも広い地域に郵送されていたタイムズには好都合な部分もあったのである。

それでも、労働者の知的好奇心が高まってくるにしたがって、一般大衆にも買える廉価新聞の要求、印紙税の撤廃を求める運動が起こってきた。勢いとは恐ろしいものである。労働者も組合を作り始めると、その流れを止めることができなかった。1850 年に三税廃止法が議会で提出され、55 年にスタンプ税、広告税の廃止案が可決。さらに、61 年には紙税の廃止も決まった。印紙税が廃止されると、イギリス全国の新聞紙数は飛躍的に伸びた（表 4 参照）。

表 3 18-19 世紀の英国における新聞課税

スタンプ税（1 部ごと）

年	額
1789- 97	2d.
1797-1815	3.5d.
1815- 36	4d.
1836- 55	1d.
1855	撤廃

広告税（1 項目ごと）

年	額
1789- 97	2s.6d.
1797-1815	3s.
1815- 33	3s.6d.
1833- 53	1s.6d
1853	撤廃

出所：表 3 川北稔『「非労働時間」の生活史』1987 p.70.

紙 税（重量 1 ポンド当たり）

年	額
1803-36	3d.ペンス
1836-61	1.5d.
1861	撤廃

表 4 渡辺牧「近代ジャーナリズムの発展過程」『新聞学評論』28 号(1979), p.109.

表 4 19 世紀後半新聞紙数

年 代	新聞紙数
1851	563
1861	1,165
1870	1,390
1880	1,986
1890	2,234
1900	2,488

こうして、イギリス新聞界の廉価新聞の誕生の時期を迎えたのである。中でも最もタイムズに脅威を与えたのはディリーテレグラフ (*The Daily Telegraph*)⁸の出現であった。発刊 6 年後には 13 万部という、当時のタイムズの 2 倍の部数を獲得し、さらに 10 年後には 24 万部を発行するようになり、紙面で「世界最大の部数」を誇るほどに成長した。また、

1870 年には、グラッドストーン (William Ewart Gladstone :1868-74) 内閣のもとで、初等教育法 (Elementary Education Act) が制定され、識字率が高まっていった。この法律によって読者層は、中層階級の下層および、労働者階級にまで、広がっていくのである。識字率は、男子では 1841 年に 67%、71 年に 80%、女子も 51%から 73%となり、19 世紀後期には、男女平均しても 4 人のうち 3 人が読み書きできるほどになっていた⁹。

大衆、廉価新聞の出現、識字率の上昇は、必ずしもタイムズには好都合ではなかった。読者層に幅ができ、各新聞の特色が現れることによって、読者が分かれていくのがより明確になっていったからである。

4. ウォルター一族の手を離れたタイムズ

⁸ 印紙税全廃の直後に、ロンドンで最初の 2 ペンス、4 頁建て *Daily Telegraph and Courier* が発行された。その後、ペニーペーパーになり題号もディリーテレグラフ紙と変え、現在なお有力紙のひとつである。ニュースを詳細に、だが明るく、かつ平易、摘要本位にし、読者に提供することを心がけている。タイムズよりは軽く、読者層が広い日刊紙である。

⁹ 川北稔 『「非労働時間」の生活史』(リプロポート、1987)、p.84。

ウォルター3世は息子ジョン・ウォルター（John Walter :1846-70）に期待をかけタイムズの経営を継がせるために、海外を視察させ学ばせていた。ところがこの若きウォルターは、ある時人命救助のため冷たい湖に飛び込み、若くして命を落としてしまったのである。深い悲しみにくれたウォルター3世は、自ら経営を続けなければならなかった。それでも自分の後を我が子に継がせたいという親心から、次男のアーサー・ウォルター（Arthur Fraser Walter : 1847-1910）を次第に経営に参加させていった。ところが、アーサーは兄がタイムズを継ぐと思っていたため、当初あまり新聞社の経営に興味を持たず、そのせいもあってか、ウォルター3世はアーサーの経営者としての才能を認めていなかったようだ。そうした中で、ウォルター3世の死後タイムズの経営を継いだのは、結局アーサー・ウォルターであった。そしてその頃から、ウォルター一族だけでなく、タイムズ自体にもかげりがみえ始めてきたのである。

当時のタイムズは、1860年代に6万部にも達していた部数が、3万6,000部にまで落ち込んでいた（図5参照）。というのは、イギリスのジャーナリズム界がニュージャーナリズム時代¹⁰を迎えたからだ。

「保守的」な新聞は、発行部数の上で大衆紙に差をつけられていくようになった。アーサーは伝統を守ろうとするがゆえに、紙面の大幅な改革をするわけにもいかず、落ち込んでいく様子を手を拱いてみている状態であった。

残念ながら、彼は父ウォルター3世、祖父のウォルター2世のような大胆な試みをするほどの企画力、経済力はなかった。そして経営の危機は確実に迫ってきていたのである。

この頃、タイムズとは逆にイギリス新聞界に影響を与えるようになった人物が登場する。

¹⁰ アメリカ新聞界の影響を受けた時代。新聞の見出しを大きく派手にしたり、人情味のある読み物など、社会面に力点をおいた新聞が流行した。その代表が、ウィリアム・トーマス・スティード（William Thomas Stead）のペル・メル・ガゼット *The Pall Mall Gazette* である。このペル・メル・ガゼットの成功に刺激され夕刊紙スター *The Star*（1885年創刊）やサン *The Sun*（1893年創刊）が誕生した。

表 5 タイムズの年次別発行部数

1785 年	1,000	アルフレッド・ハームワース (Alfred Harmsworth) 後のノースクリフ卿 (Lord Northcliffe: 1865-1922) ¹¹ である。彼は「固い新聞」と「大衆の新聞」とに区別し、広く中産階級や無産階級の男女に「安く愛されて読まれる新聞」として、1896年、半ペンスのデイリー・メール (Daily Mail) ¹² を創刊した。 ところが、皮肉にもこのノースクリフ卿が、瀕死のタイムズを救ったのである。発行部数が伸び悩み、経済的ピンチに立たされたタイムズは売りに出され、このときノースクリ
1830 年	11,000	
1868 年	60,000	
1900 年	35,642	
1914 年	183,196	
1949 年	258,992	
1969 年	431,432	
1978 年	295,864	
1984 年	464,000	
1985 年	478,000	

門奈直樹「ザ・タイムズの 200 年」

『総合ジャーナリズム研究』No.112(1985), p.18

フ卿が 32 万ポンドで買収したのだ。その結果、ノースクリフ卿がタイムズの経営者として、経営権ばかりでなく、編集権までも掌握した。

そしてノースクリフ卿は、「タイムズは、世界で孤立している。編集の

¹¹ 1865 年、ダブリン市の事務弁護士の子供として生まれた。幼少の頃から、ジャーナリズムにとりつかれ、わずか 13 歳で学園雑誌を編集した、という逸話も残っているほどの興味をジャーナリズムに示していた。まず初めに、彼はコベントリーで発行されていた *Bicycling News* という地方紙の編集長をつとめたが、その後それだけに飽きたらずロンドンで週刊紙 *Answers* を発行。パズルや懸賞などの新しい趣向を盛り込んだ。さらに、子供向け、女性向けなどの違った読者を対象に出版物を発行。次々に成功をおさめ、ロンドンの新聞界に君臨する地位を築き上げたのである。拙論「マス・メディア企業の集中化」『ソフィア』No.155 (1990・秋)

¹² 1862 年創刊。この新聞は複雑な問題や記事を平易な文章で短くし、続きの読み物も載せ、政界、社交界のゴシップや家庭面に力を入れ、新聞を大衆の生活に持ち込んでいく役割をした。そして、何よりも、見解や主張より発行部数に重点を置く大衆新聞の存在を明確にした。

力点がずれている。国民の興味をもっと大切にしなければいけない」¹³と改革を始めたのである。さっそく新しい印刷機を導入、新聞の近代化を行ない、定価も1ペニーと安くした。この結果、発行部数は17万部と上昇したのであった。内容的にも、写真を増やし、軽評論のコラムなどを載せ、変化を遂げていった。

しかし伝統を重んじるアーサーは、こうした変化に我慢がならず、ノースクリフ卿に意義を申し立てた。むろん、名目だけの役員となったアーサーの意見にノースクリフ卿は耳を貸すこともなく、アーサーはタイムズが大衆化されていく様子を手を拱いて見ているしかなかった。こうして失意の内に、アーサーは64歳でこの世を去ったのである。

一方永年の読者の中には、アーサーと同じように格式高いタイムズを望んだ人も少なくなかったのである。ところが、絶大なる力を有していたノースクリフ卿の手にタイムズがあつては、大衆路線へと突き進む変化を押えることはできなかった。実はノースクリフ卿自身も、タイムズの伝統を考えると変革には躊躇した時期もあった。しかし、タイムズを続けるには、新しい読者を増やし、発行部数を増加させることによって経済的な建て直しが必要だったのである。

その頃、アーサーの息子、ジョン・ウォルター4世 (John Walter IV) は、オックスフォード大学卒業後、タイムズに入社し、特派員としてスペイン、ポルトガルなどを転々としタイムズの基盤を固めていた。タイムズ創立の一族であるという自覚から、なんとかタイムズを我が一族のものにもう一度しようと、おじの持ち株を譲り受け機会を狙っていたのである。しかし、ノースクリフ卿が活着している間はどうしようもなかった。

1922年、ノースクリフ卿が亡くなると、懇意にしていたジョン・アスター (John Jacob Astor : 1886-1971) ¹⁴がタイムズを入札し、筆頭株主

¹³ 浅井泰範 「英国の浮沈を反映した“偉大な新聞”」『総合ジャーナリズム講座』 社団法人東京社、1985、p.9。

¹⁴ アメリカの有力者の子孫で、子爵の息子であったが、1911年から3年間インドの総督となり、後22年労働党から議会に進出。同年、タイムズの所有者となり、タイムズの政治的独立性を確立した。1953年には、イギリスのプレス・カウンシルの初代議長に選出されている。小糸

及び会長に就任。そのアスターとウォルター4世は共同出資で、信託を経営して、タイムズの経営にあたることになる。こうして2人がめざしたのは、世論を反映したタイムズ、利益を上げることのできる新聞作りであった。そのために、再び編集権と所有権の分離が図られた。しかし、一度ウォルター一族の手から離れてしまったタイムズである。以前のタイムズを復活させるための最大の貢献者は資金力のあったアスター卿であった。そのために、結局ウォルター4世も、父と同じく名目だけの役員となってしまった。こうして、経済危機を迎えたタイムズは一族以外の人の手により救出されはしたが、どんどんウォルター一族から遠ざかっていった。

時代の波にのって、成長を遂げたウォルター一族のタイムズは、皮肉にも大衆化という時代の波に流され、ウォルター一族の手から遠く離れていく運命にあったのかもしれない。

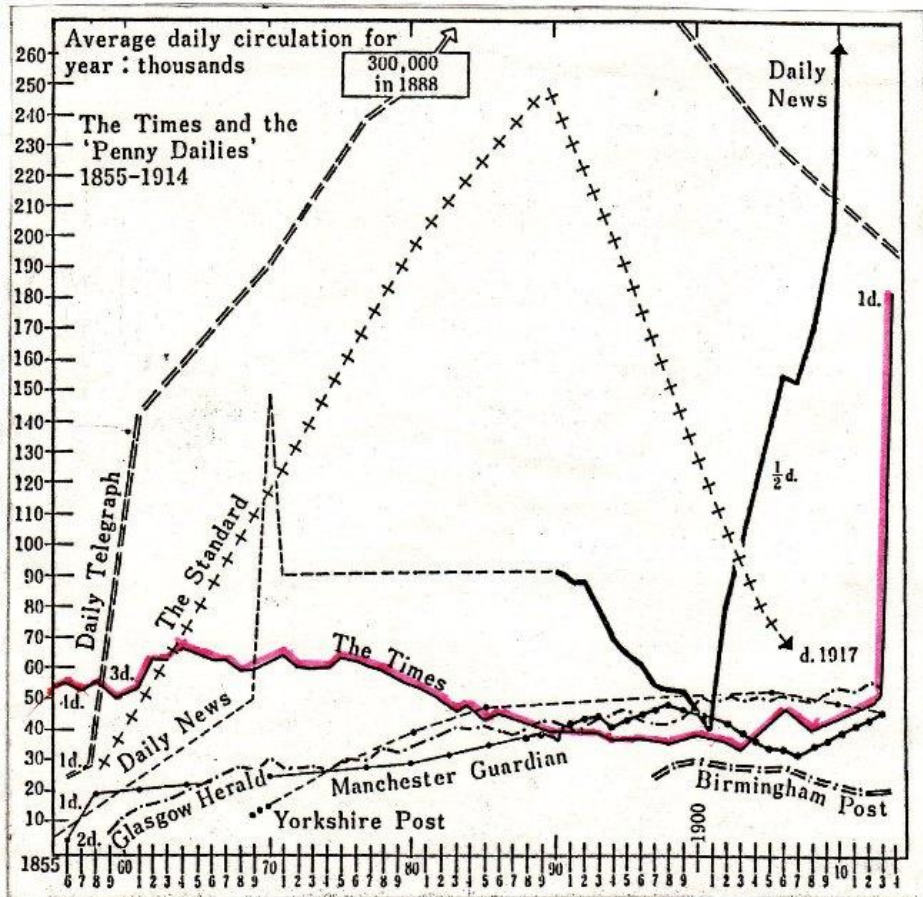
【参考文献】(上)(下)

- 浅井泰範「英国の浮沈を反映した“偉大な新聞”」『総合ジャーナリズム研究』No.112(1985・春)
- 星名定雄『郵便の歴史』みすず書房 1982
- 江尻 進『ヨーロッパの新聞』日本新聞協会 1982
- 石川敏男訳著『図説英国史』ニューカレントインターナショナル 1987
- 磯部佑一郎『イギリス新聞史』ジャパンタイムズ 1984
- 梶谷素久『新訂ヨーロッパ新聞史』桜楓社 1981
- 梶谷素久『大英帝国とインド』第三文明社 1981
- 川北 稔『「非労働時間」の生活史』リプロポート 1987
- 川北 稔、村岡健次『イギリス近代史』ミネルヴァ書房 1986
- 小糸忠吾『激動の第三世界と大国のマスメディア』理想出版社 1980
- 小林章夫『コーヒーハウス』駸々堂 1984
- 小林章夫『ロンドンフェア』駸々堂 1986
- 倉田保雄『スクープ』講談社 1985
- 倉田保雄『ニュースの商人ロイター』新潮社 1979
-

- マーティン, K. 島田巽訳『新聞と大衆』岩波書店 1961
- 馬渡 力『印刷発明物語』日本印刷技術協会 1981
- Merrill, J.C. 山室まりや訳『世界の一流新聞』
早川書房 1970
- 門奈直樹「ザ・タイムズの200年」『総合ジャーナリズム研究』
No.112 (1985・春)
- 門奈直樹「最近イギリス・マスコミ事情」
『総合ジャーナリズム研究』No.114 (1985・秋)
- 長島伸一『世紀末までの大英帝国』法政大学出版局 1987
- Nightly, F. 芳地昌三訳『戦争報道の内幕』時事通信社 1987
- 小野秀雄『内外新聞史』日本新聞協会 1961
- Oswaldo de Rivero, 玉城肇訳『西洋印刷文化史』鮎書房 1943
- リーダー, W. J., 小林司、山田博久訳『英国生活物語』
晶文社 1983
- 島屋政一『印刷文明史 第一巻』五月書房 1980
- 庄司浅水『印刷文化史』印刷学会出版部 1975
- Steinberg, S. H., 高野彰訳『西洋印刷文化史』日本図書館協会 1985
- 高木教典「欧米の新聞経営の現状」『新聞研究』No.397,398
(1984年8月、9月号)
- 殿岡昭郎『現代新聞紙学』玉川出版部 1979
- 角山 栄、川北 稔『路地裏の大英帝国』平凡社 1982
- 内川芳美「17、8世紀におけるロンドンのコーヒーハウスについて」
『新聞研究』No.17(1951)
- 上野精一『上野精一文集』朝日新聞社 1972
- 渡辺牧「近代イギリス・ジャーナリズム発展過程」
『新聞学評論』No.28 (1979)
- Bainaridge, Cyril. *One Hundred years of Journalism.*
London: Macmillan, 1984.
- Boyd-Barrett, Oliver. *The International News Agencies.*
London: Sage, 1980.
- Brown, Lucy. *Victorian News and Newspaper.*
Oxford: Clarendon Press. 1985.
- Evans, Harold. *Good Times, Bad Times.*

- London: George Weidenfield & Nicol Ltd, 1983.
- Heren,Louis. *The Powers of The Press?*
London: Orbis Publishing Ltd. 1985
- Howard, Philip. *We thundered out-200 years of the Times.*
London: Times Books Ltd. 1985.
- Smith, Anthony. *The Newspaper an Internationary History.*
London: Thomas and Hudson, 1982.
- Walker, Martin. *Power of the Press.*
London: Londonquartet Books. 1982.
- Westmancoast, John. *Newspaper.* London: The British Library. 1985
- William, Keith. *The English Newspaper.*
London: Springwood Books, 1977.
- Woods, Oliver & Bishop, James. *The Story of the Times.*
London: Michael Joseph, 1985.
- The History of the Times.* Vol.I, Vol.II-V
London: The Times.1935, 1985
- The Times Past Present Future.* London: The Times. 1985.
- Who Did What..* London: Mitchell Beazley, 1974
- Who Was Who in American Historical* volume 1607-1896. Chicago:
The A.N.Marguius Company 1967

図表 10 高級紙の部数の推移 (1855-1914 年)



David Ayerst. Biography of a Newspaper. 1971.

川北稔 『大英帝国とインド』 1981 p.8